



面打師、保田紹雲氏の能面

荒屋鋪 透 (中部大学民族資料博物館 館長)

面打師、保田紹雲(やすだ・じょううん)氏の仕事場をお訪ねしたのは、2018年7月である。保田先生には博物館で開催予定の企画展に、制作された能面を拝借しようと考え、また展覧会初日の記念講演会をお願いするつもりであった。

面打師(めんうちし)とは、実際の能楽の舞台上で用いる能面の制作者である。保田先生によると、江戸時代まで世襲の面打師の家、面打家である出目元休家(でめげんきゅうけ)、大野出目家(おおのでのめけ)の二家が幕末まで続いたが、明治維新以降、途絶えたという。第二次大戦後、京都の北沢如意(きたざわ・によい)という人が、素人に能面制作を教える教室を開講し、その技術指導を受けた林龍雲(はやし・りゅううん)が保田先生の師匠にあたる。さらに宝生流(ほうしょうりゅう)の能楽師で能面研究者であった内藤泰二(ないとう・たいじ)から、先生は能面について教えを受けている。能面制作のみならず前述の出目家、また大名家などの能面収集について造詣が深いのは、そうした所以である。面打師のキャリアは半世紀に及び120面ほど制作されている。

能楽の起源は古いが室町時代に将

軍、足利義満の庇護のもと従来の田楽、猿楽を体系化し、観賞する高位、高官の幽玄好みにあわせて、題材も王朝文化に採って、能楽は次第に洗練されていく。世阿弥の『花伝書』には、完成された能楽(江戸時代まで猿楽と呼ぶ)のかたちが記されている。応仁の乱以降、能楽は地方の戦国大名を頼ることになるが、とくに豊臣秀吉の晩年の能楽への熱狂的な愛好はよく知られている。徳川幕府は能楽を武家の式楽と定めた。能楽は公式儀礼となったのである。

民族資料博物館の今年の秋季企画展覧会『仮面のありか…フェースのゆくえ』展(2018年10月23日～2019年1月8日)は、収蔵資料を中心に、一部作品資料を借用してオセアニア、アフリカ、アジアと、地域は限られているが、資料・書籍など約60点(仮面約30点を含む)で構成した。仮面は儀式・祭礼・演劇・舞踊などで使用する文化人類学の資料だが、その造形性は美術史の上でも興味深く、アフリカの仮面は20世紀の西洋美術に影響を与えている。ピカソのキュビズム(立体主義)がその好例である。

私はこの展覧会にぜひ、日本の能面



保田氏のアトリエにて

を展示してみたいと考えた。仮面としての能面は「中間表情」つまり、一見、無表情に見える顔のなかに力強い表現力を持ち、抑制のきいた能楽の舞台のなかで、人間とその靈魂に潜む無限の世界を表現している、と思うからだ。

本展のポスター、リーフレット等で紹介した、保田先生制作の能面《泥眼(でいがん)》は、源氏物語の葵上に登場するが、眼に金泥(こんでい)が塗られ、それをつけた女性がすでに死霊であることを意味している。日本の能面に限らず、仮面は死者と生きている人間たちを結びつける道具であり、仮面をつけた者はその靈魂がのりうつる体験をしていく。だからこそ、能楽は死が間近にあった武士たちに愛されたのであろう。

保田紹雲氏は「面新社(めんしやうしゃ)」という能面研究会を主宰し、毎年1月から約1か月間、名古屋市鶴舞中央図書館で能面の展示と研究発表を行っている。そうした能面のいくつかは、すでに2008年、早稲田大学演劇博物館で開催された『現代能狂言作家展』に展示されている。

索引

- | | |
|--|---|
| <p>◇巻頭</p> <p>1 面打師、保田紹雲氏の能面
中部大学民族資料博物館館長 荒屋鋪 透</p> <p>2018春季・夏季・秋季行事報告</p> <p>◇講座</p> <p>2 4月 2018年度(平成30年)特別講座(古典絵画)開講
日本美術院特待・
中部大学民族資料博物館外部専門委員 下川 辰彦</p> <p>2 8月 9月 2018年度伊藤平左工門のカメラコレクション展
「カメラ女子セレクション」
中部大学名誉教授・建築学科客員教授 内藤 和彦
中部大学平左工門カメラ同好会</p> <p>◇研修見学</p> <p>3 10月 JICA 海外研修員の民族資料博物館見学
中部大学現代教育学部教授 宮川 秀俊</p> | <p>◇秋季企画展示</p> <p>4 10月 秋季企画展示「コレクション・テーマ展
仮面のありか…フェースのゆくえ」</p> <p>5 10月 12月 秋季企画展「コレクション・テーマ展 仮面のありか…フェースのゆくえ」関連テーマ
中部大学民族資料博物館 原田 千夏子</p> <p>◇授業見学</p> <p>6 10月 CAAC 講義「旅と文学」授業内見学の三年間
CAAC 講義「旅と文学」非常勤講師 岡本 美和子</p> <p>7 10月 作品解説
《現状再現模写 源氏物語絵巻(柏木三)》作品解説
中部大学民族資料博物館 原田 千夏子</p> <p>◇トピック</p> <p>8 特別講座(古典絵画)受講生が作品展に出品、入選</p> <p>8 2019 行事案内</p> |
|--|---|

4
月

実技講座

2018年度(平成30年)
特別講座(古典絵画)開講

| 期間 | 2018年4月18日(水)～2019年1月16日(水)

(通年・連続26回) 水曜・午後

| 場所 | 中部大学10号館106Jゼミ室

受講者数：17人(通年)

指導講師：下川 辰彦(日本美術院特待・中部大学民族資料博物館 外部専門委員)

担当：原田 千夏子(中部大学民族資料博物館)

平成30年度(2018年)の特別講座(古典絵画)の開講にあたり、新たに今年度の制作課題を、初日のガイダンスにおいて発表した。昨年度に、《鳥獣戯画卷》(国宝・平安時代後期)の模写に挑戦したときには、白描による絵巻物における墨の線描、特に墨の濃淡のはげしい勢いのある運筆による線描表現を学んだので、次の段階として、彩色が加

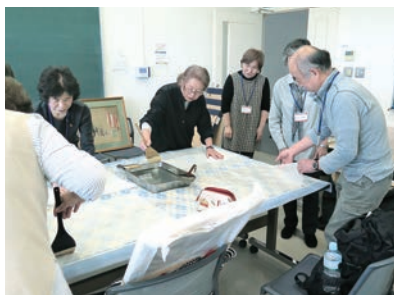
わった「ほり塗り」による表現を学ぶために、《伴大納言絵巻》(国宝・鎌倉初期)、《信貴山縁起絵巻》(国宝・平安時代後期)、《平治物語絵巻》(国宝・鎌倉時代)から場面を各自が選び、制作にあたる。例年のとおり、本講座では和紙の裏面に別の裏打ち紙を刷毛で制作パネルに貼る「裏打ち」作業を受講生自身で実際に行なうところから始まる。和紙の種類に応

じた特徴や工程による性質の変化等を具体的に認識する点が制作に重要となるからである。本講座では、復元模写ではなく、現状再現模写を行なうことから、古画作品の現状の状態から、形や色をくみとり、古色に近い色味を現代の材料で再現するよう試みる。入手が難しい材料の一部は、自身で収集してきた天然産の材を提供し、日本の伝統絵画に用いられていた、本来の純度の高い材料の品質を画面の仕上がりとともに実際に体験するようにした。

一方、古画の技法を現代作品に応用する意識を常に持つことを本講座では目標としているため、模写制作と同時に、各自は自身の創作作品もそれぞれのスケジュールのもとで進行し、年度末の発表展示を目標に制作をすすめた。(下川)



ガイダンスの様子



講座制作風景

8
月
9
月

企画展示

2018年度
伊藤平左工門のカメラコレクション展
「カメラ女子セレクション」

| 期間 | 2018年8月5日(日)～8日(水)、9月13日(木)

| 会場 | 中部大学附属三浦記念図書館1階 エントランスホール

主催：中部大学平左工門カメラ同好会
中部大学民族資料博物館

企画代表：内藤 和彦(中部大学名誉教授・建築学科客員教授)

入場者数：約80人(8/5-8)、約40人(9/13)

2018年8月5～8日の本学「夏のオープンキャンパス」、9月13日の「中部大学フェア」に合わせ、中部大学附属三浦記念図書館・1階エントランスホールにて、標

記展示を行った。主催は「中部大学平左工門カメラ同好会」、「中部大学民族資料博物館」、協賛は「(有)中部大学サービス」協力は「中部大学建築学科」。それぞれ

の観覧者数は、場所がエントランスホールだったことから、実数のカウントはできなかったものの、我々同好会メンバーが説明・応対した人数はそれぞれ80名、40名程であった。

伊藤平左工門カメラコレクションとその展示会について

故伊藤平左工門、本学名誉教授は、我が国屈指の宮大工であり日本建築史学者・教育者であったが同時に、巷ではライカカメラのコレクターとしても有名な方であった。没後、奥様から故大西学園長に申し出があり、本学に寄贈されたのがこのコレクションである。その数は数百点におよぶ。

人類の遺産ともなるはずのコレクションでもあり、分類・整理・保管をしっかりやるようにとの故学園長の指示に添うべく、「中部大学平左エ門カメラ同好会」をつくり、これらの作業を行っていくこ

とにした。集まったメンバーはフィルムカメラの愛好家でありその知識は計り知れない人達ばかりだった。しかしそれでも、そう簡単な作業ではなかった。そこで一計を案じ、整理のできた順に展示会を開催し、そのパンフを集めて全リストとすることにした。今までに「ライカ」「ミノックス」「ローライフレックス」「ツァイスイコンと蛇腹カメラ」「大型・その他のカメラ」と計5回の展示を行い、新聞社・マスコミにも取りあげられるなど、その都度一定の評価を得てきた。

そして全リスト「伊藤平左エ門

のカメラコレクション」が出来た。これを機に今年、伊藤先生のカメラコレクションを本学民族資料博物館に移管することにした。

その手始めの展示が今回の「カメラ女子セレクション」である。これは本同好会の女性メンバー4名が選んだカメラを展示したもので、分類・整理・保管作業の一環でもあった過去の展示テーマとは異なる内容となった。今後どうするかは未定だが、これからの我々同好会の展示・活動にご期待とご理解とご支援を賜りたい。よろしく願います。(内藤)



カメラコレクション展 展示風景

10月

研修見学

JICA海外研修員の民族資料博物館見学

【期間】 2018年10月16日 (火) 午後
【場所】 中部大学民族資料博物館 常設展示室

参加者数：18人 (研修関係者を含む)
研修担当：宮川 秀俊 (中部大学現代教育学部教授)
中部大学 JICA 研修支援室



JICA海外研修員見学の様子

中部大学は、国際協力機構 (JICA) 課題別研修「産業技術教育」を2014年度から受託し実施していますが、毎年初日の開講式に引き続いて、民族資料博物館を訪問するのが恒例になっています。これまでの5年間に、下表のように、世界8地域の44ヶ国から87名が見学しています。

JICA海外研修員の見学者数 (人)

地域/年度	2014	2015	2016	2017	2018	計
東・東南アジア	7	2	3	5	6	23
南アジア	1	1	0	1	0	3
中央アジア	0	0	2	3	2	7
大洋州	0	1	1	2	1	5
中近東	2	0	0	0	1	3
アフリカ	9	7	9	9	5	39
欧州	0	0	1	0	0	1
中南米	1	4	0	0	1	6
合計	20	15	16	20	16	87

博物館見学は、中部大学の国際的な学術施設の一つとして紹介すると同時に、世界各国から来日している研修員に世界と日本・中部大学の係わりを知っていただき、これから始まる6週間の研修内容に親近感を持っていただくことを意図しています。この研修には特にアフリカからの参加者が多く、また本博物館の

アフリカに係わる展示の多さも相まって、その効果には手応えを感じています。研修は、「日本の教育」、「日本の産業技術」、「日本の社会」など、多くの内容で構成されていますが、一方では、このような世界との係わりを知ることも大事と考えています。

毎日実施している研修評価票によると、本見学への研修員の印

象は、「世界の様々な民俗資料を見て、それらにまつわるストーリーを知ることができて興味深かった (カンボジア)」、「日本が自国だけではなく、他国の民俗品や文化も大切にしていることが分かった (マレーシア)」、「アフリカの民俗資料を見ることができ、良かった。このような場所は、国と国との繋がりを強め、アフリカ文化を学生や訪れる人たちに見てもらえるよい機会になると思う (モザンビーク)」、「館長の説明がとても分かりやすく、興味深いものだった (ウズベキスタン)」などの言葉が得られており、好印象であることが分かります。過去の研修員には、自国の民族衣装を持参して、本博物館で展示していただくように寄贈した方 (スリランカ) もいます。

本年度の研修は、新たな3年計画の初年度です。これからも引き続き、本博物館の訪問を予定したいと考えていますので、よろしく願います。(宮川)

「コレクション・テーマ展 仮面のありか…フェースのゆくえ」

【期間】 2018年10月23日(火) ～2019年1月8日(火)
【会場】 中部大学民族資料博物館 シルクロード室、1階エントランス

企画：中部大学民族資料博物館
荒屋鋪 透、前田 富士男、原田 千夏子

企画協力：嘉原 優子(人文学部教授・運営委員)
大橋 岳(人文学部講師・運営委員)

入場者数：1,328人

収蔵資料を中心としてテーマ設定をし、企画展示において紹介した。陳列場所を変えるだけでも、作品資料の見え方が新たな雰囲気をつたえるものだと実感することが多々あった。今回は仮面を主流にしているため、設置の角度や照明のわずかな差異によって、顔の表情が大きく異なる。とりわけ、祭礼に起源を持つ仮面を選択したので、一つの仮面のなかに人間の喜怒哀楽の感情が凝集しているともいえ、その神秘的な面差しを着実に伝える位置に注意を払いたかった。

陳列には、昨年に内装を新たにした青色の布を統一して用いた展示ケースの中に、展示資料に合わせて新たに台座をいくつか設けることにした。仮面の寸法の大小や、種別に応じて壁面と床置のバランスを考慮して全体配置を考えるようにした。

近距離からスポットライトをあてることで、眼や口元の繊細な作りや繊細な彩色装飾が際立ち、通常の常設展示における印象が一変したときには、実物資料の持つ表現力を引き出すために展示法の重要性をあらためて認識した。

展示期間においては、外部有識者による展示見学もあり、当館の企画催事について、多様な地域性を学習テーマに取り扱う「比較文化研究」、制作者の観点を意識して学びながら、作品資料の材料や構造を観察する「素材研究」、そして両者を融合しながら催事テーマを提案していくという、主に3つの方面からの視野をもつ点が評価され、今後の励みとなった。しかし、一方、見学一般からは、企画展示のなかで、テーマの内の各章立ての説明と陳列資料との関係性がわかりにくい、という声も



展示案内

あった。解説パネルを複数設置したものの、限られた文字数と印刷レイアウトにおいて視覚的にわかりやすく伝達するための、空間及び印刷各種のデザインの工夫も今後の課題である。

今回のもう一つの新たな試みは、外部より作品資料をお借りした点にもある。保田紹雲氏制作の能面8点を展示に提供いただき、能面の表現様式の素晴らしさについて勉強させていただいた。また、地元東海地域に根付いてきた伝統文化が「現代」もなお、制作され、演劇舞台において地域の人々が育んでいる、という文化の土壌の一端を若い世代に紹介できる場にもさせていただくことができ、大変ありがたいと思っている。

(原田)



2018 秋季企画展 展示室風景

10月
—
12月

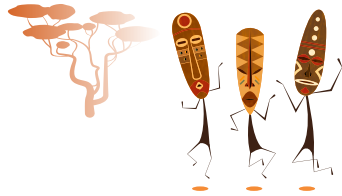
秋季連続講演

秋季連続講演

秋季企画展

「コレクション・テーマ展

仮面のありか…フェースのゆくえ」関連テーマ



講演案内

第1回 | 日時 | 2018年10月23日(火) 14:00~16:00
| 会場 | 中部大学附属三浦記念図書館 3階セミナールーム

題目：「能面について」
講師：保田 紹雲 氏(面打師・能面研究会 面紹社主宰)
司会：荒屋鋪 透(中部大学民族資料博物館長・人文学部教授)
企画：荒屋鋪 透、前田 富士男、原田 千夏子

参加者数：56人



第1回 講演の様子

2018年の秋季連続講演も、秋季企画展示に関連したテーマで企画することとなった。第一回目は、企画展示においても作品協力をしていただいた、面打師で能面研究家の保田紹雲氏に講演いただいた。大学において一般や学生を主な対象として開催する講演の場となるために、今回の内容は能楽の起源に関する歴史的系譜と合わせて、実際に制作された能面を数多く会場

へお持ちいただき、面の種類の紹介をしていただいた。さらに面打師による面の制作工程を、木材の段階や彫刻刀等を用いた専門道具の紹介も加えていただき、能面に関する知識を複合的に捉えることができる豊富な時間となり、聴講の皆様が多くから満足いただく声をいただいた。

保田氏は尾張・東海地域において、能楽師の方のみでなく地

域の能楽を愛好する一般の人びととも長く交流を深めながら、能面の研究を続けられている。武家文化と縁の深いこの地域ならではの土壌を消滅させることなく、より豊かに、現代からさらに次代へ発展させながら継承するために、こうした市井における活きた活動が息づく土地柄にあることを私たちはあらためて誇りに思うべきであろう。

(原田)

第2回 | 日時 | 2018年12月4日(火) 15:30~17:00
| 会場 | 中部大学リサーチセンター2階 大会議室

題目：「1910 - 20年代のパリ・モード
— 異国へのまなざし」

講師：朝倉 三枝 氏(フェリス学院大学 准教授)
司会：前田 富士男(中部大学客員教授)
企画：荒屋鋪 透、前田 富士男、原田 千夏子

参加者数：15人



第2回 講演の様子

秋季企画展示に関連したテーマで企画する連続講演の第二回目として、服飾文化論の研究者である朝倉三枝氏をお招きして講演いただいた。今回の企画展示

において、収蔵資料のなかでも仮面を中心に紹介する点について、館内で、学生の具体的な興味関心との結びつきを念頭に、例えば、化粧や装いについてのアプ

ローチをとり入れる意向も重視し、あわせて講演はその観点から人選いただいた。朝倉先生には、西洋、特にフランスはパリの第一次世界大戦の前後の時代の風潮

に焦点をあて、アフリカ各国の民族的な装飾や、18世紀のロココ美術のなかで人気を博した日本の漆の調度品等から、新たなアート表現を模索した造形作家ジャン・デュナンの作品について紹介いただいた。漆という材料を、写真の背景に用いて、平面的な空間表現の見せ方に新しさを求めた、服飾の光沢ある質感に発想を得て、アフリカ女性の装飾との組み合わせを試みるなど、異文

化の融合からまた別の表現を生み出そうとする時代の勢いに、日本の伝統的な技法が触発したという点は、誇らしくもあり、また素材に対する意義をこれからの私たちも再認識したいという思いが高まった。

民族文化の多くは、衣食住の様式の系譜のなかで、文字によって記録されることはない。現地における取材に依拠する調査方法が基本となっている。一方、また

別の視野では、各国、各地域の民族文化の受容の歴史をみつめることで、その価値や意義を再発見する機会となる。まさに「他者の存在、他者の眼」によって、自身を再認識することが可能となる。比較文化研究の難しさでもあり、面白さにもつながるのだろう。

(原田)

10月

授業見学

CAAC 講義 「旅と文学」授業内見学の三年間

【期間】2018年10月26日(金)

【場所】中部大学民族資料博物館 シルクロード室

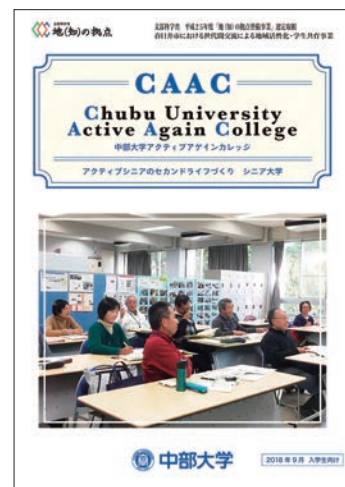
授業担当：岡本 美和子 (CAAC 講義「旅と文学」非常勤講師・中部大学非常勤講師)

参加者数：8人

中部大学民族資料博物館にはすばらしいお宝が収蔵されている、と改めて認識しました。六年ほど前です。図書館のギャラリーに「源氏物語絵巻 柏木(三)」(徳川美術館本)模写を見つけた時のことです。それまでも博物館の催事に参加し、また展示を観たりしていたのに、なんとも不覚でした。岡本聡先生からCAAC講義「旅と文学」のお話をいただき、今年で三年になります。講義の前半は岡本先生のお話『奥の細道』で、まさに旅ですが、後半の私は『源氏物語』なので、進め方を思案してい

た時、閃きました。中部大学にはお宝がある！と。古くは、住みかを離れることを「たび」と言い、必ずしも遠方へ行くばかりを意味しません。教室から学内の博物館を訪ねることも「たび」ではないか。そうだ、「源氏物語絵巻」を観に博物館へ行こう！わくわくしながら講義を開始しました。

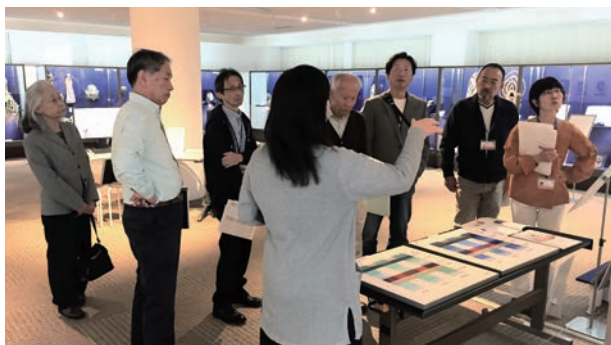
2016年度は光源氏が京都北山へ「たび」する若紫巻や、絵巻に関わる柏木巻を読みました。博物館で源氏物語絵巻やシルクロード伝来の作品など見学し、原田千夏子学芸員から日本の色彩等の専門的なお話をじっくり



<https://www3.chubu.ac.jp/caac/>

聴きました。「詳しく説明を受けられるのは、CAACの特典かなと思った」と、受講生の皆さんの目が輝いておりました。

2017年度は源氏物語の四季をめぐる恋に注目しました。須磨巻の秋、柏木巻の衛門督柏木の恋など読みました。学芸員の方の案内で鑑賞する絵巻は、柏木の遺児である薫を光源氏が抱



見学の様子

く場面です。薫が生まれて五十日の祝いの儀式に、源氏はわが子ではない赤児をわが子として抱くことになったのです。これは絶対の秘密でした。衝撃的な時空が吹抜屋台の鋭い構図に表れています。「平安・鎌倉時代の高度な技術力についてよくわかった」「幸せを感じる時間となった」「日本の四季の素晴らし

さは人間の感性をもみがき上げるといふ事が、誇りに思えた」等の声が聞かれました。

2018年度は源氏物語の「かいま見」を軸に、成長した薫を描く宇治十帖まで広げました。「学芸員の方の分かりやすい解説で平安の時代がかいま見えた感じがしました。教室での講義だけでなくフィールドワークも

新鮮で理解が早くなるのでありがたいです」等の感想が寄せられました。見学は受講生の皆さんの学ぶ心を刺激し、鑑賞に深まりを見せました。

中部大学民族資料博物館への「たび」は、まだ始まったばかりです。 (岡本)

10月

作品解説

《現状再現模写 源氏物語絵巻(柏木三)》作品解説

解説担当：原田 千夏子 (中部大学民族資料博物館)

CAAC 講義「旅と文学」における授業担当の岡本美和子先生が「源氏物語」を学習題目にあげていらっしゃることから、本学蔵の模写作品《源氏物語絵巻》を実際に鑑賞しながら、絵画の描かれた平安時代後期の持つ美術史上の時代的性質について、仏教の受容と色彩と絵具による表現の様式的発展の一部について解説をさせていただきました。

この授業は、社会人対象の講義ということもあり、歴史文化全般に関心を持つ方も多く、毎回熱

心に耳を傾けていただける時間として有難く思っている。また、過去に当館において日本画家の下川辰彦先生にご協力いただき視覚教材として作成した「日本画の古典絵画を想定した天然顔料の彩色の重ね塗りの表現の見本」の一部のパネルを見学時に資料として活用することで、文学という言葉の世界を、当時発展した、平安貴族の装束における「襲ねの色目(かさねのいろめ)」や、箔や染料によって色鮮やかな料紙装飾の様子を、より具体的なイメージ

と結びつけて想像していただけるものと思って紹介した。また、日本の伝統文化の「今」を考える契機になることを願って画像ではなく、画家の実際の筆による模写作品の制作活動によって、秘技とされた伝統技法の継承が現代の日本において研究が続けられており、それにより文化財保存修復技術が発展し、海外の遺跡の保存活動にも日本の技術が活かされており、国際貢献の現状についての話題も添えた。 (原田)



千村俊二 作

《現状再現模写 源氏物語絵巻(柏木三)》

(2010年、学校法人中部大学蔵)

(原本：徳川美術館、平安時代、12世紀、国宝)

特別講座(古典絵画)受講生が作品展に出品、入選

当館で企画開催している日本絵画の実技講座『特別講座(古典絵画)』の受講生のなかには、地域の展覧会への応募出品を通じて、制作意欲を高めて

いる方も少なくありません。2018年度には、上野の森美術館展にて加藤さんが出品、入選されたとのことのお知らせを受けましたので報告いたします。

「第31回 上野の森美術館・日本の自然を描く展(2018)」

《宝ヶ池のオンドリたち》

2018年度 受講生

加藤 あずさ さん



2019

行事案内

MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

◇成果発表展示

2018年度(平成30年) 特別講座(古典絵画)受講生作品展

「— 平安時代後期から鎌倉時代の古典絵画模写

《信貴山縁起絵巻》《伴大納言絵巻》《平治物語絵巻》と作品」

会 期：2019年3月22日～4月17日(予定)

会 場：中部大学民族資料博物館 多目的室 他

※3月23日(土) 特別開館(15時まで)、4月11日(木) 作品講評会

◇学校法人中部大学創立80周年記念 企画展示

学校法人中部大学創立80周年記念 企画展示

「中部大学の庭と岡田憲久(仮称)」

会 期：2019年10月～2020年1月(予定)

会 場：中部大学民族資料博物館 シルクロード室 他